「父と子の音楽コンプレックス」

幼い頃気付いていたが、我が家には若い頃の父のマンドリンと、アコーディオンがあった。かといって父がこれらを弾いているのを聴いた事はなかった。その内、家にオルガンがやって来た、父が人差し指でしきりに「上海帰りのリル」「誰か故郷を思わざる」を弾き、僕もそれに習って同じように弾き、歌を覚えた。

父にも僕にも音楽・楽器への同じ憧れ・想い・そして「焦り」があったのではないかと想像する。僕は小学３年の頃ヴァイオリンを習わされた。音楽に対する父の執念を感じる。小さなヴァイオリンと鈴木慎一教本を提げて、毎週何曜日かの夕方先生のお宅に通っていたが、肝心の僕は何を習っているかの興味も全く無く、家で練習をする事も無く、両親もそんな僕の背中を押すでも無く、「キラキラ星」をやたら手探りでギーギーやっていたようだがいつの間にか挫折してしまっていた。ところがこれが僕の命を救うという運命の悪戯と遭遇することになる、・・・この教室の発表会が小倉のデパートであり家族全員で聴きに行った（僕は演奏する人ではなかったが）、その日が昭和２７年の西日本大豪雨の日で電車は止まり、何時間も掛かって線路を歩いて帰り、門司の社宅の家に着いてみると、何と我が家の家半分が、崩れた前の山の土砂に潰されていた、土砂に埋まって亡くなった近所の人の腕の白さをチラッと見たのを今でも思い出す。

閑話休題、もともと僕は低音の声に張りがあり、小・中学校の卒業式では送辞・答辞をいつも読まされ、英語弁論大会ではいつも堂々と演壇に立っていた。

ある日の中学での音楽の時間の歌唱のテストで、全員が一曲ずつ歌わされた事があったが、偶々その曲が僕の声域に丁度合っていたのか、自分でも旨く歌えたなと思っていたところ、その先生から合唱部へ入る様勧誘され、気の進まないまま惰性のまま練習に加わっていた。５０年後の今でも続いているＮＨＫ全国学校音楽コンクールに出場し、歌った課題曲「灯台」、自由曲「ハレルヤ」は今でも口遊める。合唱部に入ると彼ら部員は皆、吹奏楽団の団員でもあった。新しい部員数名が、先生から「息を何分止めていられるかやってみよ」と言われ、意味も判らず適当にやったあと、一人ひとり楽器のパートが決められた。或る者はトランペット、或る者はトロンボーン・・・そして体力も肺活量も無かったのか僕にはクラリネットが与えられた。元々音楽少年ではなかったせいだと思うが、嬉しさも・感動も無く、皆の音に合わせて何となく吹いていた。「君が代行進曲」、「ボギー大佐（クワイ河マーチ）」、何曲かの「スーザの行進曲」等を披露していた。

家庭では父も母も音楽とは縁が無く、僕も音楽からは縁遠い少年時代であり、一方では合唱部・吹奏楽団という音楽のど真ん中にはいたが、夢も志も生まれない惨めな春春の音楽生活だった。中学を終える頃のあ

る日、音楽室で件の音楽の先生が一人でモーツアルトの「トルコ行進曲」を弾いているのを目の前で聴き、僕の体がビリビリと震え、頭の中に奇妙な衝撃が走った・・・「これが音楽だ！！」。　家にはレコードがあり、これを機に僕は生まれて始めてクラシックと呼ばれているレコードを買った。曰くブラームスの「ハンガリヤン舞曲」、ロッシーニ「ウィリアムテル序曲」、ベートーベン「運命」「田園」・・・所謂クラシック音楽の入り口を知った瞬間であった。そして高校生の頃、福岡では２社の民間ラジオ放送局がクラシック曲のステレオ放送なるものを始めていた、部屋の左右に２台のラジオを置き、生まれて始めての「ステレオ放送」なるものを毎週必死の思いで聴いていた覚えがある。

大学に入り下宿先の小６の女の子がピアノを習っていたので、僕もやってみようと思い、街の楽器店の張り紙を探し「ピアノを習いたい！」と言うと、「あなたのお子さんですか？」と聞かれたが、何とか僅かの小遣いを工面しながら習い続けた。「バイエルピアノ教本」をひたすら進めてゆき１冊目を卒業したが、今から思うと唯ひたすら指の運びを鍛えたと言うだけで、本当の音楽の真髄には触れる事はなかった。体で奏でる音楽、和音の魅力、楽しさ・・・との出会いの無いままの青春時代であった。

会社員になり暫くして、ギターを身に付けられないかな？と思った。音楽への憧れは執拗に僕の体の中にあったのだろう。会社からの帰途に

ギター教室があったので、教えてもらう事にした。何度か通い、取り敢えず自分用のギターも買い求め、帰ってからも必死に練習したが・・・ダメだった。自分の短い爪が原因に違いないと愁いながら諦めた。

自分には音楽の遺伝子が目を醒ましてくれず、そして家庭的に楽しい音楽教育を享けることが出来なかった・・・と密かに諦めの境地にあった。

多くのピアニスト達が、小さい頃ピアノに触れただけで、極く「自然に」ピアノの世界に入っていったり、若い人達がギターを手にしただけで「何気なく」和音とコードを身に付けたり・・・というのは一体何なのだろう？　そうはいってもその後の想像できないほどの訓練・努力があるのは間違いないが・・・。

音楽は元々人類誕生の時から存在していたものだろうから体の中にその遺伝子は眠っている、それが目を覚ます人とそうでない人が居るようだ。

暗い話ばかりになってしまったが、サラリーマン生活４０年の間、折しも世はカラオケ大流行の時代、行き付けのスナックではよく歌わせてもらった。僕の持ち歌３０曲余りがメニューになっていて、ママの目配せでマイクが渡され、前奏が始ると僕の低音とアフタービートの歌が流れ始めると言う訳だ。曰く

「夜霧のブルース」「ダンスパーティーの夜」「赤と黒のブルース」「好き

だった」「哀愁の街に霧が降る」「泣かないで」「ある雨の午後」「君の名は」「君いとしき人よ」・・・・・

・・・お粗末な音楽人生でした。

秋冷えて　子らのフルート変調す

寝つかれぬ薄暑フルート鳴り続く

春暮れて眼も衰えてジャズを聴く

レイチャールズ聴いて句作の半夏かな

梅雨晴れや昼寝の犬とショパン聴く

ショパンの夜　泳ぎ疲れの耳痛む

遠き日のシャンソン唄い秋なりき

胸に抱くホルンの光る風五月

ホルン抱き少女は荒き胸呼吸

空仰ぐ白木蓮の大合唱

白木蓮　夜のテノール響きおり

秋高し　街行く少女鼓笛隊

春告げる鳥よ少年合唱団

鳥になり唄う少年合唱団

ハモニカの鳴る家のあり風五月

聖五月　少年ハモニカ吹いてみる

トランペット校舎に響く新学期

放課後のトランペットや春告げる

薫風にトランペットの音揺れる

オカリナの音を揺らして青嵐

放課後に鳴る管楽器　春の暮れ

遠き日のシャンソン唄い秋なりき